

## 「心によって見る」

山折哲雄さんという哲学者がいらっしゃいます。彼は、「心」という言葉について、深く探求を続け、他のいかなる言語にも翻訳できない、日本語特有の「心」理解を提唱しました。簡単に言うと、日本語の「心」には意味が多すぎるのです。身体的なところでは「心臓」という意味をもち、精神的なところでは、「心」は、精神の場所であり、また、精神の働きであり、しかも、その働きは、日常生活で扱われるところの「親切心」とか「熱心」とか「親心」とかある一方で、「信仰心」、「信心」、「道心」という宗教的な領域の事柄をも取り扱っています。日本語の「心」というのは、ある意味で、日常と非日常、世俗と宗教、見えるものと見えざるものを繋げる橋渡しの場所であり、働きであると言えます。どんなに無宗教、無信仰を貫こうと思っても、なかなか日本社会で、それが難しいことは、私たちの文化に「心」という言葉が根付いているからかも知れません。秋の気比祭りしかり、お盆のお墓参りしかり、初詣や七夕、雛祭りも、言ってしまうと宗教儀礼ですね。それぞれに、「心」が込められており、その「心」を感じ、味わうことを、私たちは古くから続けてきました。

もっとも「心」という言葉を使うなら、即、それは宗教だと言いたいわけではありません。心理学とか、心太、心中とか、宗教と関わりのない「心」はたくさんあります。ただ、その日本語がもつ多くの「心」の意味を探りながら、今回の聖書箇所であり、説教題とした「心によって見る」という聖句を、今日は味わってみたいと思います。

今回の聖書箇所の大まかな事情背景は、イスラエルの英雄的な王様であるダビデが、初めて見出される時に「容姿や背の高さなどの見た目に囚われるな」という神様からの忠告があった、と

ということです。預言者サムエルは、神様のこの忠告を聞いて、無事にイスラエルの二代目の王様を見つけることができました。

「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」。「目」という本来の視覚器官を差し置いて、「心」という精神的な働きを用いて、神様は物事を見ているのだ、と言います。日本語の「心」にまつわる関連する言葉を用いて表現してみますと、神様は、好奇心と探求心を忘れずに、しかし、用心しながら、良心に従って、核心に迫る物の見方をされる方である、と言えるかも知れません。表面的な見た目で判断するのではなく、そこには幾重にも敷かれた「心」の働きがあるのだ、ということです。ただ、それは、別に神様の専売特許というわけではなく、私たちにもある程度真似のできることだと思います。表面的な見た目と、あと出所の分からない真偽不明な情報に惑わされず、しっかりと向き合い、まさに心を通わす交流を経て、初めて、その人の本質を知るようになる。それは、私たちの人間関係においても、非常に重要で丁寧な関わり方であると言えます。

ところで、日本語で「心」と訳されている、もともとのヘブライ語は「レブ」という単語です。実は、この「レブ」というヘブライ語の単語も、日本語の「心」同様に、とても広い意味を持っています。「レブ」は、心臓を意味しますし、感情や意思を表す時にも使われます。また、記憶、思考、理解、道徳なども含むでいて、日本語の「心」と同じような意味の範囲をカバーしています。日本語の「心」について調べていた時、「「心」を意味する言葉に、こんなにも沢山の他の意味を持たせている言語はない」なんて解説に出会いましたが、実はヘブライ語の「レブ」も沢山の意味を持つ言葉だったということ、今回知ることができました。面倒くさいですが、こういう言葉の研究は、やっぱり大事ですね。

話を戻します。つまり、日本語訳では、神様がとても心を込めて慎重に物事を見極める方である

というメッセージが浮かび上がってきますが、もともとヘブライ語においても、神様の物事の核心に迫る意思をもって、しっかりと考え巡らせるお姿を描き出しているわけです。決して、パッと見て、パッと決めるという簡単な決断ではない、ということです。

ペンテコステの今日、私たちは非常に難しい課題を与えられています。それは、「聖霊」とは何か、ということです。私たちは「聖霊」を視覚的な形で捉えようと試み、でも、上手くいかず、結局聖霊って何だろう、という疑問の周りをウロウロすることがあります。聖書には、聖霊を捉える試みとして、風のような舌、炎のような舌、ペロであると書いてみたり。そして、後世、そうした聖書の記述から、愚直に、風や燃える舌を描いた宗教絵画も生み出されました。しかし、やっぱり、そういう見た目を意識した捉え方では、聖霊を正しく考えることはできないのだと思います。「人間が見るようには見ない」という神様の御言葉に従って、「心によって見る」という姿勢を忘れないこと。つまり、注意深く周りを観察し、耳を澄ませて聴くことを忘れずに、また、自分の心に浮かびあがる沢山の感情をつぶさに見つめ、そして、人と人の間に生まれる様々な感情の交流に心を留めてみる。ようするに、自分の内側と、自分の周りで起こる全ての出来事の中に、聖霊の働きを感じてみようということです。目には見えないけれど、心で見ることができるであろう聖霊に思いを馳せてみる。意外に、自分の日々の生活や仕事を底上げしてくれている、見えざる力の影響を感じることができるかも知れません。そして、その力の源こそ、風のように行き交う聖霊の働きであると言えるのではないのでしょうか。

目には見えず、触れられず、正体の掴み切れない存在。聖霊さま。ですが、すでに私たちは、その聖霊の働きによって強められた人々が残した、この礼拝堂で今日も穏やかなひと時を過ごしています。見えない原因の、しかし、はっきりと触れられる結果の中を、私たちは感謝して過ごしています。その揺るぎない事実からも、聖霊の核心に迫るきっかけが得られるかも知れません。

目に映ることばかりじゃなく、心によって見ることで、初めて分かる有り難い恵みも沢山あるはず。思えば、私たちがキリスト者として生きるようになったのも、私たちの見た目や表面的なことに惑わされず、神様が私たちの内面深くまで見通して、心によって見定めてくれて、特別に祝福して下さったからです。神様が熱心に私たちを観察して、「キリスト者にしてやろう」と思われたのだから、もう胸を張って「アーメン」と、その通りになりますようにと、告白して参りたいと思います。

最後に、一つ。実は、「主は心によって見る」という日本語訳は、前後の文脈を考慮した上での意識です。つまり、もともとのヘブライ語の意味とはちょっと違います。ヘブライ語の意味に忠実になって、直訳しますと、この箇所は「主は、心をご覧になる」となります。「主は、心をご覧になる」。神様は、私たちの心を見て、それで良しとしてくださって、ここに招いてくださいました。そのことも心に留めながら、共に感謝の祈りを捧げたいと思います。お祈りを致します。

神様。聖霊の力が教会を生み出したことを憶える、このペンテコステの礼拝に、私たちをここに集めてくださり、感謝致します。自分自身でされ、掴み切ることのできない心の中を、あなたは熱心に関心をもって見極めてくださり、私たちに相応しい道を、豊かな祝福を備えてくださいます。そのことを知って、信頼と感謝を胸に、日々の信仰生活を送ることができますように、私たちの歩みを支え、導いてください。聖霊の働きを心によって見出しながら、励まされ、力づけられ、またそれぞれの場所でキリストの良き香りを醸すことができますように。今日、あなたの心によって見出された吉谷和子さんの洗礼式の上に、豊かな聖霊が注がれ、幸いな初めの一步を踏み出すことができますように。心からお願いを致します。

この願いと感謝、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げいたします。